プリンセス

伽ノ花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プリンセス

【Ｎコード】

Ｎ１１７２Ｂ

【作者名】

伽ノ花

【あらすじ】

はちゃめちゃ、おてんばお姫様の、大騒動なお話です。

プロローグ

災いがよって来るという人間は本当にいるようだ。

この国の姫は、何かとやっかい事に巻き込まれる。

本人にはまったくその気はないのようなのだが…

周りから、災いがよってくるのである。

今回は貴族であるフリード家に食事に招かれたはいいが…

第一章

「姫様、王がお呼びですよ」
メイド服を着た使いの者が、私の部屋まで訪れた。
「えええぇ～、めんどくさいわ、父上に会いに行くには、ここからどれだけかかると思っているの！」
この使いの侍女が、その王の元からここまで、来たなんて事はおかまい無しなのである。
「そんな、事おっしゃらずに…」
とても、困った顔をしている。
「うううぅ～わかったわ、行きますとも！行きますとも！」
そう言うと、使いは安心したように、
「失礼しました」
と部屋を出て行った。
「行かなきゃ駄目かぁ～」
椅子に座りながら、天井を見上げるのである。
「まぁ～、有言実行っと！」
そう言って勢いよく椅子から立ち上がるのである。
そして、その勢いのまま、扉を開けて一気にもうだっしゅ！ときめこみたい所だが、廊下ですれ違う、侍女などが廊下を走ろうものなら、がみがみ叱られるのが目に見えているので、そんな事は出来ない。
トボトボと長い長い廊下を歩き続けながら、ふと思った。
（父上が私を呼ぶなんて、何かあったのかな？）
「あぁ～それにしても長いは、あとどれだけ歩けばよいのやら…」
ふぅ、と溜息をつく。
「確か、ここの角を左だったかな？」
え？あれ？違う。
「あー！もう迷子決定よっ！」

自分の、家で迷子なるなんて信じられない。
仕方ない、戻ってさっき場所を右に曲がってみようかしら…
手で髪をくるくると遊びだす。
そう、困ったときの癖なのである。
こっちも違うじゃない。
誰かいないのっ！
どうして、こういう時に限って。
あー、もう嫌だ嫌だ。
誰よ、方向音痴にしたのは！
こんな一人事を言っていても仕方がないのはわかっているが…
トボトボと、自分の家を迷子になりながら歩き進めて行く。
「だっせ、だっせ、何家で迷子になってるんだィ？」
「うるさい！あんたは黙ってなさいミーナ！」
ミーナと呼ばれた小動物は、耳は長く、目はくるっと大きくピンク色の人形のような生き物である。ミーナは、このお姫様のペット？なのである。
なんで疑問系かって…。別にお姫様が飼っているわけではなく、ミーナが勝手について来たからである。
「ミーナ！お父様のお部屋はどこっ！貴方わかっているのでしょう？」
「けっ、ばれたかィ」
「仕方ないお姫様だねィ。付いておいでィ」

第二章

コンコン。
大きな扉をノックする。
「お父様、リーチェですわ」
「おー、リーチェ入りなさい」
「失礼します」
そう言って、扉を開いて中に入る。
「リーチェ、悪いんだがフリード家に食事に行ってきてくれないだろうか…」
「まぁ、お父様ったら、絶対に食事だけですまそうなんて考えていませんわね」
いうなればこれはお見合い。
ただの食事会ではないのである。
「リーチェ頼むよ。フリード家の主の頼みなんだよ」
「何をおしゃっているのですか？お父様…？お父様貴方はこの国の王でしょう？どうしてたかが貴族に気をつかっているのです」
「リーチェ…頼むよ…」
「はぁ～、わかりましたわ。行くには行きますけど、食事だけして帰ってきますからねっ！」
大股で、さっさと部屋から出て行こうとする。
「リーチェ？道はわかっているね？」
「ええ、何回かお父様と行ったことありますもの…使いの者も付けてくれるのでしょう？」
「ああ…」
さっさと扉を開けて、部屋から出る。
もう、お父様ったら、またこんなくだらない…。
「ねぇ？ミーナもそう思うでしょう？」
「しらないねィ。大人の事情ってもんがあるんだろよ」

「あーあー。私は大人になんてなりたくないわー！」
「あれれー？食事会っていつよ！？」
「リーチェはやっぱりだかだねィ」
「ま～いいわ～。別に行きたいわけじゃないもの」
そして、また迷子になりながら自分の部屋にやっとたどり着いたのである。
私が、丁度部屋にたどり着いたと同時に、
「姫様、お食事会の予定ですが、明日夜7時からだそうです」
「わかったわよ」
そう言うと、使いのものは部屋から出て行った。
「あー！もう嫌だーっ！」
ベッドにばふっと、突っ伏す。
「お行儀悪いんじゃないのかィ？お姫様～」
「うるさいわねー！」
ベッドの上でドタバタと暴れまくる。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1172b/

プリンセス

2011年1月28日06時37分発行